

東京朝刊 2021/02/23(火)

電力市場高騰 再エネ業者に痛手

電力市場の取引価格はこの冬、異常な高騰が続いた。そのおおりで、太陽光や風力など再生可能エネルギーを扱う新規参入業者（新電力）の多くが経営難に陥った。脱炭素社会の柱と期待される再エネの拡大に暗雲が垂れこめる。

●「売り切れ」3週間

新電力は現在約700社あり、自前の発電設備を持たない会社も多い。そうした会社は日本本卸電力取引所（JEPX）を通じて電気を調達し、顧客に販売している。再エネを手掛ける新電力の多くも、自前でまかなえない分をここで買っている。市場には電力会社の余った電気が売りに出され、入札で価格が決まる。

この取引所で昨年12月、異変が起こった。24時間分の電気を前日に取引するスポット市場の価格が同月下旬から上昇したのだ。1月6日に1円2時100円をつけ、同15日には過去最高値の同25円まで跳ね上がった。

「異変」前は平均同8円前後だったので、実に約30倍もの高騰だ。沈静化したのは1月25日ごろ。この間、市場に出される電気が減り、12月26日以降、売れ残りが「ほぼゼロ」の状態が約3週間続いた。海外の電力市場に詳しい安田陽・京都大特任教授は「数時間の高騰が散発する例は海外でもあるが、これだ

け長引いた例は聞いたことがない。世界初の『異常事態』だと語っている」と話す。

新電力が電気を計画通り確保できない場合、代わりに電力会社と顧客をつなぐ送配電会社が確保している電気を供給するが、その際、新電力は「インバランス料金」という違反金を払う義務がある。1月17日からこの料金が200円の上限が設定されたが、それまで上げられなかった。違反金回避の焦りから、卸価格は連鎖的に高騰した。

経営への打撃は大きい。秋田県鹿角市の第三セクター「かつのパワー」は2月14日、採算が取れないとして小売り事業を休止した。千葉県匝瑳市の耕作放棄地などで太陽光発電を手掛けるグリーンヒールズパワーは、数千万円の損失を抱えたが、電気料金は値上げせず、緊急増資などで急場をしのぐ。

●「小池にクジラが」

異変の原因は何だったのか。背景として、火力発電の燃料となる液化天然ガス（LNG）の輸入が世界的な需要急増の影響

で滞ったことや、真冬を迎え電力需要が高まったことが指摘されている。だが、エネルギー戦略研究所所長の山家公雄・京都大特任教授は「12月15日の出稼率に着目する。全国の電力需要を調整している国の認可法人「電力広域的運営推進機関」（広域機関）が大手電力各社に対し、関西電力へ電力を融通するようこの冬初めて指示したのだ。

関西では1月、高浜原発4号機（福井県高浜町）の蒸気発生炉内に不具合が見つかった。4号機と同じタイプの3号機（87万キロワット）は12月下旬に再稼働を予定していたが、確認検査が避けられなくなった。関西が3号機の再稼働延期を発表したのは12月15日。広域機関の融通指示は、関西の依頼を受けた措置だった。

さらに12月25日、徳島県阿南市にある「パワーの石炭火力発電所」（橋津1号機）（105万キロワット）がトラブルで停止。関西が引き取っていた出力70万キロワットが消えた。その後、広域機関の融通指示は、関西大飯原発4号機（118万キロワット）が再稼働して発電が始まる前日の1月16日まで、計18回（そのうち

ち関西向けは94回）発動された。電力・ガス取引監視等委員会のデータによると、12月29日以降、大手電力会社が市場に出す電気よりも、市場から買う電気の量が上回るようになった。山家さんは「本来は電気の売り手である大手電力が供給余力を失い、買い手に回った。小さな池にクジラが入って来たようなもので、小魚（新電力）はひとたまりもない」と語る。

●未成熟な電力市場

今回の高騰は、新電力が売り物である電気の調達を、市場に大きく依存している実態を浮き彫りにした。一方で、燃料のLNGが不足する中、原発や火力発電所などの大規模電源の再稼働延期や休止が引き金になった可能性が見て取れ、大手電力の備えの甘さも指摘されている。

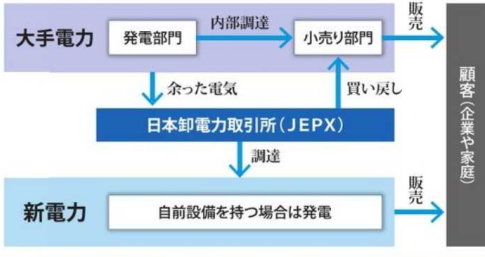
山家さんが問題視するのは電力市場における「情報の不平等さ」だ。今回、発電所休止などの大手電力側の供給動向が、市場価格に反映されるまでに数日かかった。休止などの情報は公表されるものの、実際の供給にどう影響するかは分かりにくい。2016年に電力小売りが全面自由化されたとはいえ、販売電力に占める新電力のシェアは現状約2割で、依然として大手電力の寡占状態にある。その大手電力がどれだけの量の電気を市場に出せるかという情報が見えにくい中、大手と新電力が競争するのは公平な環境とは言えない。

山家さんは「今回の『事件』は電力自由化の不備がもたらした。透明性を高め、信頼される電力市場に育てていく必要がある」と訴える。【阿部周二】



供給力が落ちた大手電力「福島県浜田市の火力発電所」、本社へから加古志撮影

電力市場のイメージ



新電力が運営する太陽光発電所「福島県南相馬市で、手塚耕一郎撮影

「次回の『くらしナビ・環境』は6月6日に掲載します。」